

降誕祭主日礼拝説教「神の子の宿るところ」

日本基督教団石神井教会 2017年12月24日

【旧約聖書日課】サムエル記上 2章1～10節

1 ハンナは祈って言った。

「主にあってわたしの心は喜び、主にあってわたしは角を高く上げる。
わたしは敵に対して口を大きく開き、御救いを喜び祝う。

2 聖なる方は主のみ。あなたと並ぶ者はだれもいない。岩と頼むのはわたしたちの神のみ。

3 驕り高ぶるな、高ぶって語るな。思い上がった言葉を口にしてはならない。

主は何事も知っておられる神、人の行いが正されずに済むであろうか。

4 勇士の弓は折られるが、よろめく者は力を帯びる。

5 食べ飽きている者はパンのために雇われ、飢えている者は再び飢えることがない。

子のない女は七人の子を産み、多くの子をもつ女は衰える。

6 主は命を絶ち、また命を与え、陰府に下し、また引き上げてくださる。

7 主は貧しくし、また富ませ、低くし、また高めてくださる。

8 弱い者を塵の中から立ち上がらせ、貧しい者を芥の中から高く上げ

高貴な者と共に座に着かせ、栄光の座を嗣業としてお与えになる。

大地のもろもろの柱は主のもの、主は世界をそれらの上に据えられた。

9 主の慈しみに生きる者の足を主は守り、主に逆らう者を闇の沈黙に落とされる。

人は力によって勝つのではない。

10 主は逆らう者を打ち砕き、天から彼らに雷鳴をとどろかされる。

主は地の果てまで裁きを及ぼし、王に力を与え、油注がれた者の角を高く上げられる。」

【福音書日課】ルカによる福音書 1章39～56節

39 そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。40 そして、ザカリヤの家に入ってエリサベトに挨拶した。41 マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、42 声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。43 わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。44 あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。45 主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです。」

46 そこで、マリアは言った。

47 「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

48 身分の低い、この主のはしめのためにも、目を留めてくださったからです。

今から後、いつの世の人も、わたしを幸いな者と言うでしょう。

49 力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。

その御名は尊く、

50 その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます。

51 主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、

52 権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、

53 飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。

54 その僕イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません。

55 わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」

56 マリアは、三か月ほどエリサベトのところ滞りしてから、自分の家に帰った。

クリスマスの挨拶を！

クリスマス・イブの日を日曜日に迎えました。夕べの聖夜礼拝に先立って、今日、わたしたちは、このクリスマスの祝いの礼拝へと共に導かれてきました。この国の多くの教会の慣わしに従って、わたしたちは、今年も、クリスマスの祝いを、直前の日曜日に前倒しして、今日、主日のクリスマス礼拝といたしました。

この祝いの礼拝を特に憶えておいでくださった方も、少なくないでしょう。この朝の礼拝と、夕べの聖夜礼拝を、クリスマスの祝いの礼拝として皆さまにご案内しました。いつもそのようにしていますから、教会の皆さんは何の不思議にも思われたいでしょう。けれども、伝統的な暦の習慣を大切にしている教会ならば、この日の朝の礼拝は、まだクリスマスの祝いとは呼びません。クリスマスに備える「待降節（アドヴェント）」の最後の礼拝です。クリスマスの祝いの礼拝は、イブの夕べの礼拝から始まるのです。そのような習慣の教会をよくご存じならば、この朝の礼拝がクリスマスの祝いであるというのは、少しばかり気の早い話ということになるかもしれません。まだ、この朝は、クリスマスの祝いの挨拶をするには早い、のです。

そのような理屈を考え出すと、このクリスマスの祝いの礼拝に集まられた皆さんとクリスマスの挨拶をするべきか、躊躇してしまいそうです。けれども、今日は、はっきりと皆さんに申し上げます。安心して、クリスマスの挨拶をいたしましょう。クリスマス・イブの夕べを迎えていないからといって、クリスマスの挨拶をしていけないことは、まったくないのです。わたしかからも、皆さんにクリスマスのご挨拶を申し上げます、「クリスマスおめでとう、恵まれた方。クリスマスにお生まれの御子、主があなたと共においでです！」と。

クリスマスにご降誕をお祝いする神の御子キリストが、まだお生まれになられる前、御子の母マリアの胎にさえまだ身ごもったかどうか分からないような段階で、はじめてクリスマスの挨拶を告げた者がありました。マリアのもとに遣わされた天使ガブリエルです。天使ガブリエルは、何も知らない少女マリアの前に突然現れて、マリアにクリスマスの挨拶を告げたのです。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」（ルカ 1:28）。

「でも、それは、天使の挨拶でしょう」とおっしゃるかもしれません。けれども、この天使ガブリエルの挨拶を告げられたマリアは、すぐに、急いで出かけて行って、親類のエリサベトのもとを訪ねました。エリサベトに挨拶をするためです。今日の福音書日課が物語っている場面です。それは、天使から告げられたクリスマスの挨拶だったのではないのでしょうか。天使から「おめでとう」とクリスマスの挨拶を告げられて、もちろん、最初は戸惑い、「いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」（1:29）マリアでした。でも、その挨拶をマリアは受け入れた。そして、受け入れた挨拶を、今度は自分が告げる番になったのです。

マリアの挨拶を受け入れて、エリサベトも挨拶を返しました。祝福の挨拶を告げました。まだ御子が胎に宿ったかどうかという段階にもかかわらず、この場面は、一番早いクリスマスの祝いの場面だと言ってもよいのです。

「あなたは祝福された方」

天使に導かれて、マリアとエリサベトは顔を合わせ、挨拶を交わして、クリスマスの祝いのときを迎えました。今日ここにおいでの方々は、どのようなクリスマスの天使に導かれて、この礼拝においでくださったのでしょうか。

そのように申し上げると、皆さんの中には、「いいえ、わたしは、天使など信じていないし、必要でもありません。わたしは、自分の意志で、教会に来て、礼拝にあずかっているのです」とおっしゃる方があるかもしれません。でも、本当にそうでしょうか。

それぞれ、思い巡らしてみたいと思います。皆さんを教会へと誘ってくれた人が、いたのではないのでしょうか。今日この礼拝に加わるようにと呼びかけてくれたり、後押ししてくれたり、あるいは陰ながら動いてくれた誰かが、いたのではないのでしょうか。その人は、神から遣わされた天使だったはずですが、それは、家族や友人の姿をしていたかもしれません。名も知れない他人の姿をしていたかもしれません。いかにも天使らしい姿はしていなかったかもしれないけれども、その姿さえはっきりと見せなかったかもしれないけれども、必ずそのような存在が、一人ひとりの歩みの中で働いていたはずなのです。

御子の母マリアの信仰の歩みは、そのような天使の存在に気づくことから始まりました。その存在に戸惑い、何のことかと理解するのに時間もかかったかもしれませんが、天使の存在を認めたところから、マリアの信仰の人生は、始まったのです。

クリスマスの天使に導かれて、ここにおいでくださった皆さん。多くの皆さんは、すでに洗礼も受けたキリスト信者かもしれませんが、そうでない皆さんも、今日は特に、少なくないでしょう。教会の礼拝においでくださった皆さんですから、頭ごなしにキリストのことを否定するような方はいらっしゃらないでしょうが、それでも、「わたしは信者ではないから」と一線を引かれている方は少なからずいらっしゃると思います。

そのような方が、それでもここにおいでくださっていることを、わたしは本当にうれしく思います。「ようこそ、おいでくださいました」と、教会を代表して歓迎を申し上げたいと思います。加えて、マリアを迎えたエリサベトにならって、祝福を申し上げたいのです。「あなたは、祝福された方です。まだお気づきではないかもしれませんが、あなたの内に、祝福されたお方、御子が宿られています。そのようなあなたとお会いすることができたので、わたしの内に御宿りくださっている御子が、わたしを喜び躍らせているようです」と。

エリサベトは、マリアに祝福を告げて、言いました、「**わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう**」。マリアは、まだ十四、五歳の少女です。まだ自分の身に起こっていることがよく分かっていないような少女でしたが、エリサベトは、「**わたしの主のお母さま**」と呼んだのです。「あなたには、神の御子が宿っているのです。あなたは、御子の宿ってくださった**貴い存在**です」と。この言葉を聞いたマリアは、何と幸いなことでしょう。

クリスマスの御子は大きくなる！

クリスマスの天使に誘われて、クリスマスの祝いへと導かれて来られた皆さんのことを、「わたしの主のお母さま」とお呼びしたら、おかしいでしょうか。いいえ、決しておかしくはないのです。マリアだけが「主のお母さま」になる資格のある者だったわけではないのですから。いいえ、マリアに何か資格があって、「主のお母さま」と呼ばれたわけではないのですから。

エリサベトの家を訪ねたときには、マリアには、まだ自分が御子を宿しているという自覚さえ、なかったことでしょう。天使ガブリエルに「あなたは身ごもって、男の子を産む…」(1:31)と告げられて、「どうして」と戸惑いながらも、「お言葉どおり、この身に成りますように」(1:38)と答えたマリアでしたが、それでも、マリアの身にはっきりとした大きな変化が現れていたわけではなかったはず。かすかな、本人さえ気づかないでいたかもしれない徴候を言葉に表してマリアに示したのは、本人ではなく、最初は天使、そして続いて、エリサベトだったのです。

それでも、マリアは、「主のお母さま」になりました。天使に導かれ、エリサベトに励まされて、マリアは、自分の内に宿ったという神の御子が、少しずつ育ち、大きくなるのを、受け入れたのです。そのマリアのあり様を歌ったのが、エリサベト訪問の場面の中で伝えられている言葉、いわゆる「マリアの讃歌(マニフィカト)」と呼ばれてきた箇所(47~55節)です。これは、マリアがこのとき歌ったものではないかもしれませんが。もしかすると、御子が大きく育った後、あるいは、その御子が十字架にかけられ、葬られ、そして復活された後に、思い巡らしてきたすべてのことを振り返りながら、マリアが告白した信仰の言葉なのかもしれません。

このマリアの言葉は、「**わたしの魂は主をあがめ**」と始まります。この句を、宗教改革者のM・ルターは、原文に即すと、「わたしの全生活において、(自分を小さくして)主を大きくする」という意味だと解説しています。

母の胎に宿った小さな命が、大きく育ち、胎から生まれ出で、母と向き合いながらなお大きく育ち、いつしか母をも超えていく存在になっていく。それは、人の成長のプロセスですが、神の御子のご降誕を祝う教会は、それと同じようなプロセスで、わたしたちのうちに神がおいでくださり、大きな存在になってくださることを、大切に受け継いできました。エリサベトがマリアに認めたように、教会は、一人の人に神の御子が御宿りくださっていると認めて、そのしるしとして洗礼を授けてきました。本人もそれを受け入れるとき、教会は、その人の内から神の御子が出で現れてくださって、神の子として共に生きるしるしとして、キリストの御体と御血にあずかる聖餐に共にあずかっていたえてきました。

わたしたちは皆、マリアのように、ただ、天使に導かれ、教会のエリサベトから祝福の言葉を告げられて、キリスト者とされてきた者なのです。

皆さん。神は、御子となっておいでくださっています。お宿りくださっています。わたしたちの生活の中で、大きな存在となってくくださるのです。